

「鳴海、珈琲が入りました。……起きられますか」

昨夜の行為の為かベッドに身を沈めたままである筈の年上の情人の様子を伺いにドアを開けると、彼は既に起きていたようで。しかし何時もなら返って来る筈の起床の挨拶が聞こえてこない。代わりに聞こえてきたのは、呻くような声。

「……、鳴海、何が、」

「嗚呼、なんでもない。なんでもないんだ、気にしないでくれ」

気にしないでくれと言われて、そうですかと引き下がれる状況ではない。

毛布に包まり片膝を立てたままこちらを見やる情人の、いよいよ常とは異なる雰囲気になり、静かに室内へと足を踏み入れベッドの端へ腰掛ける。

そんな自分の動きなど目に入らないのか、彼はらしくもなく俯いたまま。

どつかしたのだろうか。彼から水の気配がする。

驚かせないよう右腕で彼の肩を抱き、そっと引き寄せると彼はその動きに逆らおうとはせずそのまま自分の右肩に額を寄せた。

「鳴海、」

その肩が震え、呼吸が変わったのが判った。

泣いている。何故、どつて。

軽く狼狽しながらも、彼が問い掛けに答えられる状態ではないことを感じ取り、腕の中で無言ですすり泣く年上の情人を包み込むように抱き締める。

どれほどの時間であるつか、だがそう長くは無い間、沈黙を保つたまま泣きじゃくる子供にするように一定の速度で背中を叩く。

普段とは全く逆の立場だな。

脳裏の中で冷静な部分がそう告げるが、しかし如何なる理由があるにせよ、情人の涙は哀しいもの。

なんとか泣き止んでくれないものだろうか。

いやしかし先ずどうして泣いているのか。

まさかとは思つが、漸く遂げることの出来た昨夜の行為の所為であるつか。

涙が出る程、後悔している……、

だとしたら自分の方が泣けてくるな、と思いつつながら彼の人の呼吸が落ち着いてきたのを感じ取り、刺激しないようにおそるおそる問い掛ける。

「嗚海……もしかして昨夜の行為が、」

「……、嗚呼いや、違う、違うんだ……ライドウ……」

「こちらの懸念を感じ取つたのか、慌てて否定する彼の言葉に、それが杞憂であつたことを察し些かどころでなく安堵するが、では何故彼はこれ程までに嘆いているのか。今度はそれが分からなかつた。そんな自分の混乱を先程から感じ取つてはいたのである。彼は、漸く波が去つたのか、肩で大きく呼吸をし、しかし顔は伏せたままで涙に濡れた声をひねり出した。

「俺……俺は」

「……はい」

「お前と、ちゃんと、全部、やって、目が覚めて……幸せでたまんなくて、」

「……」

「勿論、最後まで出来てなくなつて、充分に幸せだつたんだ。だが、やっぱり違つたら、」

「……ええ、そうですね。俺もそう思います」

「だけど同時に、俺は、昔のことも思い出さちまつて、」

こんな風に、初めて朝を迎えて。自分に嬉しそつに微笑みかけてきた人たちに、

「なんて酷工ことをしてきたんだらうつて……今、今更ながらに思い知らされて、さあ」

今になって漸く理解できた。かつての自らの行為の罪深さを。

「俺のこと……っ本気で、好きだ、って、言つてくれた奴らは居たのに、」

自分が彼ら……彼女らにしたことば。

「ほんつと……最つ低だよね……お前なんか死んじませ、地獄に墮ちらうつて罵られても、しょうが

ねエくらゐ、」

大してどころか、全く心にも無いことを口にして、惑わせて。遊んで。

「塵でも捨てるみてエに……捨てちまつた」

あんなにも、自分如きに心を捧げてくれた人たちに、

警入心えてやる事はできなかつたとしても、もっと他にやりようがあつただらうつ、どんなに辛かつただらうつ。

「……悪い、お前には……関係ないのにな。吃驚しただろ。」

辛いのは彼も同じであるのに、肩口でくしゃりと笑った気配があった。堪らなくなつて腕の抱き締める強さを強め、彼の頭を左手で覆つよつに包み込む。

「鳴海、……俺は、貴方が思つてゐるには、思いません。」

確かに、貴方が其の方々にどのような事を為してしまつたのか、俺は知りません。けれど

「けれど、貴方に惚れた俺だから判ることだつてあるんです。」

びくり、と震えた彼に視線を向けず、そのまま言葉を続ける。

「貴方という人に、心から想いを寄せる事の出来た人たちは……確かにとても傷付いてしまつたでしょう、哀しくも思われたでしょうが。」

それでも、貴方を其処まで責め立てよつとは思わなかつたと思います。

「……なんで、そんなことが言えんだよ。」

「だつて、貴方は知らなかつただけだつたから。」

他ならぬ貴方という人に情を向けた人々であれば、其の事に気付いた筈です。確かに、捨てられたことに対して物悲しさは覚えられたでしょうけれど。

「……そんな都合のいい解釈があるかよ。」

「でも、俺は間違いないと思います。」

ただ、其の方々には貴方に其れを教えよつとしてもどつたつて越えられない何かだつて、存在したのではないでしょうが。

「例えば……貴方御自身の前歴であるとか」

瞥見一時であっても其れを蔑ろにするなんて事は為さらなかったのでしょうか。

「意外と、真面目ですものね。貴方という人は」

「……意外は余計だ」

僅かにむつとした雰囲気を感じ取り、どうやら回復してきたようだと安心してふふと笑いながら背を叩き続ける。

「……そんな貴方に太刀打ちできる人は、そうそう居やしませんよ」

貴方がこうして軍を辞め、只の探偵となつた今でも、貴方を手に入れるのは至難の業だったので。

「……この俺ですら、ね」

只人でしかない其の方々が、貴方の心を手に入れることが出来なくとも不思議ではない。

そう納得して咳く自分の科臼を嘩然としながら聞いていた彼は、堪らないといった風に噴出した。

「お前……結局それってただの自画自賛じゃねエか」

くつくつくくくと肩口で肩を揺らす情人の言葉にひどいなと抗議を込めながら言葉を返す。

「だって本当のことじゃないですか」

「あー、ああ、そう、そうだよな……あめもつほんつとお前って最高だわ」

あんなに酷いことをしてきたのに、あんなに酷い気分だったのに、あんなに。

「なんかどれもこれも、お前に会えた事で吹き飛んじまったみてエだ」

もつ堪らない。

そう幸せそうに笑い続けながらそれでも悔恨の涙を滲ませ続ける。何時になくいじらしい情人に何時までも冷静な顔を向けていられよつ管も無く。

ましてや今、腕の中に居る彼は毛布に包まれてはいるが彼は未だ一糸纏わぬ姿であり。其の上先程抱き寄せた行為の所為で毛布がずれ、その裾から覗いた足の際どい箇所が目に入った。

どくり、と心臓が動く。

かあああ、と頬に血が昇り、状況にそぐわぬ即物的な反応に羞恥を覚える。急上昇した自分の体温に気付いたのか、腕の中の情人が身しろぎした。

「……ライドウ、」

「あの、」

此処に及んで先手を取られてなるものか。

「もし良ければ今一度、情けを賜つても宜しいでしょうか」

一気に吐き出した自分の誘いを、腕の中の情人は初めて目元が僅かに腫れたその面をあげ、まじまじと見やうた後、其の表現もどこかしら変だけどねエ、と照れ臭そうに微笑みながら頷いた。

「でもお前、折角シャワーも浴びて服着ちゃってるし、珈琲も淹れたんだろ。いいのか、」

「構いやしません」

そう訊きながらも学帽を奪い、ゆっくりと襯衣の釦に手をかける情人にそう返しながら自らもまた手早く衣装を寛げ、彼が身に纏っている毛布の端を持ち上げ己の身体を彼の隣に潜り込ませる。

そのまま腕の中に閉じこめると彼はくすくすと笑いながら、くすくすたくてしょうがねエなど嬉しそうに呟いた。

た

「腰は辛くありませんか、」

「今になって其れを訊くのかお前は」

順序が逆だろ、

すみません、でも、

嗚呼、良い良い。構うなって。

「辛くねえとは言えねえけど、」

立てなくなってもお煎がちゃんと面倒みてくれたら。

「……何だか俺も、お煎とやりたいじゃ」

そう言った後誘い込むように足を絡められては最早迷いは無い。

「勿論……誠心誠意、尽くさせていただきますとも」

睫毛が触れ合うほどの距離で見詰めの合いながら答えを返し、その唇を奪った。